

はじめに——「好きになる」とは

近年では性的マイノリティの認知度が高まり、そうした人々への差別を問題視する考え方も、以前よりは広まっています。おそらく多くの人が、「LGBT」や「LGBTQ」などの言葉を一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか。差別をなくす流れに向かうのであれば、それはよいことでしょう。

ですが、これまでのLGBTに関する議論から取りこぼされてきたセクシュアリティがあります。たとえば、「好きになる相手が同性なだけで、異性愛者と同じ」とか、「誰かを好きになるのは当たり前のこと」と言われることがしばしばあります。こうした発言に対して、別に問題ないのでは？と思う方もいるかもしれませんが。しかしこうした発言は、「誰もが他者を『好きになる』はずだ」ということを暗に前提としており、発言者の意図はどうあれ、「誰かを『好きになる』ことのない人はおかしい」という考えを含意してしまっています。

これに対して、他者に性的に惹かれられない人々や、他者に恋愛感情を抱かない人々が、現に存在します。こうした人々を表すのが、「アセクシユアル」や「アロマンティック」といった言

葉です。本書では、こうした人々の実態や、関連する用語などについて説明していきます。

ところで、アセクシユアルやアロマンティックはごく少数の例外的な人々であって、それ以外の人々にはとくに関係がないのでは？と思う方もいるかもしれませんが。ですがアセクシユアルやアロマンティックについての議論は、実は多くの人々にも深く関わるものです。

たとえば、誰かを「好きになる」という表現を何気なく使ってきましたが、この「好きになる」というのはどういう意味でしょうか。おそらく人によっていろいろな答えがあると思います。性的に魅力を感じる、恋愛感情を抱く、美しいと感じる、面白いと思う、尊敬や憧れを覚える、などなど、「好き」という言葉にはさまざまな要素が含まれています。そしてこれらの要素は、必ずしも結びついて感じられるとはかぎりません。たとえば性的魅力と恋愛感情も、人によっては分離したものとして経験されるのです。

あるいは「付き合いたい」とか「一緒にいたい」という欲望も、さまざまな理由から生じるものです。たとえば、恋愛感情にもとづいて付き合いたいと思う場合もあれば、生活の都合や金銭的なメリットを理由に同居する場合がありますし、気心の知れた友人同士だからという場合もあるでしょう。

同じことは性交渉についても言えます。性的魅力にもとづいて性交渉をしたいと思う場合もあれば、相手に喜んでほしいという理由、相手との関係をうまく維持したいという理由、金銭

的なメリット、快樂など、さまざま要素が考えられます。なかには性交渉に応じないと暴力を振るわれるという理由でやむなく応じるケースも、残念ながらあります。

さらに言えば、話は他者との性的・恋愛の関係だけにとどまりません。たとえば性的欲望があるから性交渉をするのだと考える方がいるかもしれませんが、性的欲望は必ずしも性交渉に結びつくわけではありません。実際に、マスターベーションはするけれど他者との性交渉をしようとは思わないという人や、性的なコンテンツを好んで視聴するけれど他者と性的な行為をしたとは思わないという人もいます。もちろん、恋愛コンテンツを好みつつ他者に恋愛感情を抱くことはない、という人もいます。

このように、性や恋愛に関する「好き」だけにかぎっても、実はさまざまな要素があります。おそらく読者のなかには、こうした要素をひとまとまりのものとして漠然と捉えている方もいるかと思えます。ですがアセクシユアルやアロマンティックの人々は、そうした漠然とした枠組みでは捉えられないような経験をしていることがあります。そしてそうした経験を言語化しようとする過程で、性や恋愛に関する認識を精緻化してきたのです。それゆえアセクシユアルやアロマンティックに関する用語、およびこうした人々の経験をj知ることjで、性や恋愛をより深く理解することにつながるはずjです。

もうひとつ重要なことがあります。それは、アセクシユアルやアロマンティックの人々が社会でいないことにされている、という問題です。たしかに最近では結婚しない人も珍しくなく、一時期と比べると性や恋愛の位置づけは相対化されているかもしれませんが。とはいえ、誰かに性的魅力を感じたり恋愛感情を抱いたりするのは当たり前のこと、誰もがそうした経験をするものだ、という考えは今でも根強く残っています。そのような世の中では、アセクシユアルやアロマンティックの人々は周囲から不愉快な扱いを受けることも少なくありません。

日常生活の場面だけでなく、制度的な面でも問題はあります。たとえばメンタルヘルスの専門家であっても、アセクシユアルやアロマンティックを一種の精神病理と結びつけて認識していることがあります。あるいは直接的に「病気だ」とみなされないとしても、アセクシユアルやアロマンティックについて知る機会がほとんどない、という問題もあります。たとえば性教育の場でアセクシユアルやアロマンティックに触れることはめったにありません。

このように、アセクシユアルやアロマンティックの人々が社会で周縁化されている状況があります。つまり何気ない慣習や制度が、実はアセクシユアルやアロマンティックを想定せずに行われており、それによってこうした人々が不利益を被ることがあるのです。そういった問題についても、本書で説明していきます。